

林原美術館NEWS

HAYASHIBARA MUSEUM OF ART NEWS 平成15年10月1日

Vol.

6

第一回林原国際芸術祭「希望の星」

特別展

「みずのきの絵画 鶏小屋からの出発」

平成15年9月21日(日)～11月24日(月)

この度、インフラットオーガゼーションの
社団法人林原共済会が中心となって、林原
国際芸術祭を定期的開催することにな
りました。障害をもちながらも、芸術の分野
で世界的に活躍している人たちの活動を通
じて、世界の人々をつなげていくというのが
コンセプトです。記念すべき第一回は林原
共済会と林原美術館の共催で、特別展み
ずのきの絵画 鶏小屋からの出発」を開
催します。

知的障害者更生施設「みずのき」(京都
府亀岡市)で、画家・西垣 篤一氏主宰によ

特別展

「素顔の瞬間」

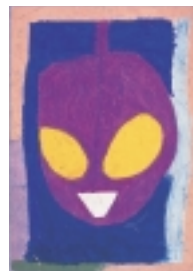
高田宮憲仁親王殿下の作品と根付コレクション

平成15年12月1日(月)～12月21日(日)

平成十四年十一月、四十七歳の若さで
高田宮殿下が薨去されました。殿下の気
さくなお人柄とともに、日本サッカー協会
の名譽総裁をはじめスポーツや文化の画面
にわたり数々の要職をお務めになるなど、
広く国民に親しまれていました。また、芸
術活動にも造詣が深く、バレエ鑑賞や自ら
オーケストラのタクトを振られるなど、さ
らに、根付の熱心な蒐集家であられて、殿
下の根付コレクションは国内外に広く知ら
れていました。

今回の展覧会では、高田宮家の「厚意に

る絵画教室が開かれたのが一九六四年。そ
の後十数年の年月を経て、彼らの中に潜在
していた能力が見事に開花し、国内外で高
い評価を得るようになりました。今回の展
覧会では、絵画とともに創造の原点となつて
いるドローイングを初めて展示します。彼ら
が生み出す質の高い作品は本当の「ミニ
ケーション
とは何かを
我々に強く
語りかけて
きます。



山本恒「ウルトラマン」

より、殿下の根付コレクションとともに、殿
下自ら撮影なさつたお写真や殿下ご自身
のお写真、宮中儀式でお召しになつた「装
束」そして、「愛用のカメシマやワイルドキャブ
記念のサッカーボール、毛巾やタクトなどのご
遺品の数々を展示します。小さな根付に凝
縮された日本独自の彫刻文化を堪能いた
だくとともに
に、殿下の「
遺徳を偲ん
でいただき
たいと思



「大黒と唐子」
長瀬 徹 (二代秀親) 19世紀

企画展

「瑞祥」

ずいしょう

平成16年1月4日(日)～2月15日(日)

瑞祥とはめでたい「し」と言う意味です。瑞
祥文様には宝尽しや七宝、松竹梅、鶴亀、文字その
ものがめでたい「寿」の字など様々な文様がありま
す。本展示では新春にふさわしく、当館の所蔵品の
中から、これら瑞祥文様を表した能装束や時絵な
どの作品を多数展示し
たします。さらに正月
にちなんだ絵画作品等
も併せて展示し、初春
の喜びをお楽しみいた
だきます。



色絵金襴手宝尽文独楽形鉢

企画展

「しるしの世界」

時絵と彫漆

平成16年2月22日(日)～3月28日(日)

器などに漆を塗り、その上加飾を施したものを
漆工芸とします。その技法は時絵・沈金・螺鈿・彫
漆など様々な種類があり、日本の工芸品の中でも最
も歴史の古いものの一つと考えられています。今回の
展示ではその中で時絵と彫漆を中心に展示します。
当館所蔵の時絵は殆どが伝統的技法による近世
のもので、調度品、特に婚礼調度品が中心となつていま
す。彫漆は元時代から明・清時代にかけての優品が
多く所蔵されていま
す。季節柄、雜道具も
展示する予定にしてい
ます。日本と中国の代
表的な漆工芸の展覧
会をどうぞお楽しみ
下さい。



花丸文時絵重硯箱

美術工芸品の保存と修理

林原美術館は、時絵・刀剣・能装束といった工芸品を核に、絵画や書跡を含め約二万件を収蔵しています。日本の美術工芸品は、日本の環境のなかで育まれた材料と職人達の技で作られ、その美しさを今に伝えています。

絵画や書跡は、絹や紙の上に描かれ、表装という技術で軸物、巻物、屏風、襖といった形に仕上げられています。この表装技術は仏教伝来とともに

日本に入ってきたといわれており、長く大切にされてきた軸物や屏風は、50〜100年の周期で時々、人が古くなった作品を修理し、仕立て直すことで現代に伝えられてきました。

当館に収蔵する、江戸時代初頭、元和年間の京の町、洛中洛外の豊かで華やかな様子を三千人以上の人物と共に描いた、重要文化財、洛中洛外図屏風『紙本金地著色 六曲一雙も下地が弛み、金箔の剥落や汚損が目立つてきた為、平成十三年から修理を依頼していました。この度、一万年にわたる修理を終え当館に戻ってまいりました。

作業は屏風を解装し、本紙をめぐり、下地骨を新しくしました。下張り・つけ張り・本紙の上張りをを行い、裏紙は新調してもとの六曲屏風に仕立てられました。作品を修理する際には、当時



重要文化財 洛中洛外図屏風 (上)右隻 (下)左隻

の仕立てなどの構造や技術、隠れた場所にある元の色彩、製作者や依頼者といった様々な情報を得ることが多くあります。今回も多くの新知見を得ることが出来ました。そのうち、いまでは茶色になっている屏風の大縁の布は、元は、紫根(紫草の根で紫色)で染めたと考えられる美しい紫色だったことがわかりました。また、重さは一対で約四十キロありました。今回得られた様々な知見は、現在進められている研究に役立てられ、来年には皆様にご覧いただけるよう準備を進めています。

(資料センター サブディレクター 坂本くらら)

EVENT

イベント便り

第三回 美術館周遊の旅

平成15年6月7日(土)、美術館周遊の旅はとっとり花回廊、足立美術館へ行きました。

足立美術館では学芸員植野泰朋氏の丁寧な解説で特別展「横山

大観と日本画の巨匠たち」を観覧しました。総勢44名、

花や庭園など自然の美しさと、作品

の素晴らしさに触

れることができ楽

しい一日となりました。

第三十六回

「林原美術館美術講座」

平成15年7月12日(土)、岡山県立美術館の講

義室にて国立民族学博物館教授の熊倉功夫先

生による講演会「茶

の湯の美意識」を開

催しました。時代を

変革した千利休の

発想と、当時の様々

な文化が解説され、

「わび」とは何かが

論じられました。80

席が満席となる盛

況な講演会となり

ました。



みずのき絵画教室と西垣篤一先生

日本女子大学家政学部児童学科助教

西村陽平

京都駅から山陰線に乗り、亀岡へ向かう。出発するとすぐ左手には、四角いコンクリートの建物で埋め尽くされている中から、ひときわ高く特異な形で、くすんだ五重塔が見えてくる。私がまだ小さかった頃、あの近くに住んでいた。五重塔を見るたびに思い出すことがある。ある夜、五重塔の近くで火事があり、夜空を焦がす炎に、私は震えていたそう。その翌日、私は一人で長靴を履いて、火事の現場を見に行った。母は、私がどこへ行ったのかと心配していた。4歳の頃のことだ。

亀岡へは、30分程で着く。駅からタクシーで10分ぐらいいつあつつか、田園の中に知的障害者更生施設「みずのき」がある。2000年3月までは、「みずのき寮」と呼ばれていた。1959年の設立だから、もう44年前になる。ここで知的障害者更生施設といっているのは、聞こえを聞くと身がまえてしまうかもしれない。確かに、「みずのき」が設立された当時は、建物の周りには高さ2メートルのコンクリートの塀がはりめぐらされ、寮生はみな丸坊主に作業服であったといつから、良い印象を与えられない。当時の社会の目が、このような状態をつくったのだと思うが、今では、一般の人たちの認識も大分変わり、寮生たちも一般の住宅に暮らすグループホームなども行われるようになってきた。現在の「みずのき」では、知的障害をもつ男女100人が、穏やかに快適な生活を送っている。

「みずのき」を世界的に有名にしたことがある。1964年から始められた絵画教室の活動だ。最初は、余暇利用による情操教育、遊びのような時間として始まった。指導された西垣先生が次のように書かれている。

古く鶏小屋にムクロを敷いて座り、八つ切り画用紙とクレパスを勝手気儘に色ならべをしたのがはじまりである。大部分が絵など描いたことがなく、初めて持ったクレパスに戸惑いながら、おそろのおそろの真白な画面を埋めてゆく様子は、悲しいと言いたいようなない消極的なものであったが、二枚目になると様子が一変した。目の前の白紙を自分の思うままに征服してゆく快感に満ちた逞しい線、強い色彩の乱舞となり、この時は将来の明るい展開を予測したのである。破れたタタミ屋根を鳴らして風が吹き抜ける初秋のことであった。

(「ART INCOGNITO」監風館 解説より)

「このようにして絵画教室が始まった。西垣先生52歳の時である。そして、14年程経た1984年頃から、画家を育てるという目標が現実のものとなってゆく。重度の知的障害をもつ人を、プロの芸術家として育てるということは、当時の常識として考えられなかったことであらう。もともと、今でもまだ信じていない人も多いのだと思うが、確かに知的な面では難しかったろうが、芸術の分野では才能がある人がいる。しかも、西垣先生の推測では、知的障害の人の一割が才能をもっているといつのである。これは、「みずのき」の実践で実証されているわけだから、自信をもって断言されているのだと思う。しかし、実際にその才能を引き出すのは難しい。誰でも才能の宝にはない。

西垣先生が実践の中で得られたことは、今の学校教育のやり方ではだめだ、といつことである。具体的には、まず徹底した個人教育でなければならぬ。そして、相手のことをよく知らなければいけない。教えるとしても、上から下へという関係ではなく、相手と同じ呼吸が出来る誠実さと親身さ^①がまず必要であるといつ。しかし、これらは教育の基本的なことではないだろうか。

1994年、「みずのき」の作品32点が、スイス・ローザンヌ市立アル・ブリット美術館に収蔵された。作品そのものの質が世界的な評価を得たわけであるが、絵画教室が始まるから30年目のことである。今、林原美術館では、「特別展 みずのきの絵画」が開かれている。今回の展覧会では、創作の原点となつている下ロイングも初めて展示されている。見る楽しみだけではなく、美術教育や人々との関係のあり方などを考える示唆に富む内容になっている。実際に見ていただきたい。日本にも優れた実践はある。

西垣先生は、指導者として知られているが、本当は画家だ。京都市立美術館に収蔵されている風景^②(1936年、卒業制作作品)といつ絵がある。「風景」といつ題だが、ずいぶん変わった絵だ。鉄道線路の工事風景を主題としているが、下には転覆したトロッコ^③上にはダンブ力^④、線路が下から上へと続いている。大胆な構図で、現実離れしている。伝統的な日本画とはかけはなれた斬新な印象を与える絵だ。表現を追求する気迫が伝わってくる。やはり、若い時から醇厚^⑤たる混じり気のない様(真を追い求める姿勢)に変わりはないようだ。

一度だけ先生のお宅を訪ねたことがあった。とりとめのない話をしながらも、部屋においてある絵が気になった。先生は、ずっと制作をやめておられたといつことであつたが、最近少し描いているといつことであつた。その絵は、薄暗い部屋に置いてあり、そのためか画面の人物もかすかに浮かびあがっているように見えた。とても繊細な画面だったので、みずのきの絵を思いだし、意外な気がした。

先生が好まれた句、

白樺を幽かに霧のゆく音か

秋櫻子

このように雰囲気であらうか。先生は、ロマンチストなのだ。ロマンチストなれば、このような仕事はできないかもしれない。



二井真信「木」1976

林原美術館の名品から



「白綾包桶側六枚胴具足」 「立涌文威二枚胴具足」

一領 江戸時代
一領 江戸時代

当館には備前池田家に伝来した品々が数多く伝えられており、「コウシヨウ」の二つの核をなしている。その中には、岡山藩の基盤を盤石なものにし名君として名高い光政公や、光政公の曾祖父にあたる恒興公ゆかりの品々など池田家歴代の当主にまつわるものも含まれており、近世大名としての池田家の研究には欠くことのできない貴重な資料であるといえる。今回ご紹介する一領の甲冑もそれら一群の中の一つである。

「白綾包桶側六枚胴具足」は、日本三名團の一つとして数えられる後楽園を造った四代藩主池田綱政公(一六三八〜一七一四)所用のもので、横板金を包んだ花菱繫ぎ浮文の白綾の美しさが殊に目を引く。前後の立拳と発手(腕尻)を紺糸で威し、金具廻りは牡丹獅子文の絵巻で包み、金銅唐草透しの座に八重菊の笠鉾を打った八双金物を据えている。黒塗頭形の兜に菅蒲の鍬形を打ち、金の輪に不動の文字を入れた前立を飾っており、力強さが感じられる。類当 垂袖、杏葉、籠手、佩楯、臍当などを具足した、室町時代以降に見られる典型的な当世具足で、制作は極めて精巧で格調高く仕上がっている。

一方、「立涌文威二枚胴具足」は時代はやや下り七代藩主池田治政公(一七五〇〜一八一八)の正妻である米子夫人所用のものである。黒漆塗の小札で、胸、草摺などを仕立て、赤地糸に白、萌葱、紫糸を用いて、相対する二本の線を雲気が立ち上がるように見立てた立涌文様に威しているが、この立涌文を織りなす色彩の妙が、見る者に心地よい印象を与えている。胸や袖の冠所は時絵でできている。兜は総覆輪の星兜で、盾庇に波文の金物を据えている。女性用と伝えられる甲冑は数少なく、色・デザインともに美しく、気品にあふれた一領である。

両者とも、当時の精緻な工芸技術が十分にあらわされており、現在まで大切に保存されてきた作品である。

現在、当館では修復技術や保存に関する科学的な調査を広い分野に亘って行っており、今回紹介した白綾包桶側六枚胴具足の色の分析や技法などの調査が進められている。白・赤・紺という、明るい配色でまとめられた色のうち、紺は藍染め、赤は紅花染めであることが分かってきた。現在の発達した技術をもってしても、復元が難しい日本の伝統技術を、少しでも後世に保存・伝承していくことは、大変重要な仕事だと考えている。

(学芸員 浅利尚民)

「白綾包桶側六枚胴具足」は、図録「林原美術館名品選」(平成元年発行)及び図録「大名 その華麗な時代」(平成十三年発行)には、白綾包桶側五枚胴具足」と掲載がありますが、近年の調査により六枚胴であることが確認されたため、ここに訂正させていただきます。



白綾包桶側六枚胴具足



立涌文威二枚胴具足

「友の会」募集のご案内

林原美術館では、平成十五年度の美術館「友の会」の会員を募集しています。会員の方には、美術館の企画展が会員証にて無料でご覧いただけます。ご同伴の方一名様も無料となります。なお、特別展では入館料が三〇〇円引きとなります。このほかにも、館が主催する各種イベントに会員料金にてご参加いただけます。館内で販売する図録、オリジナルグッズが割引価格でご購入いただけます。さらに会員の方々には展覧会やイベントなどの情報をいち早くお届けします。この機会に是非ご入会ください。

個人会員 一年 三,〇〇〇円(新規入会)
二,七〇〇円(入会継続)

法人会員 一年 三〇,〇〇〇円(新規入会)
二七,〇〇〇円(入会継続)

有効期限 三年 七〇,〇〇〇円

一年会員 平成15年4月1日〜平成16年3月31日

二年会員 平成15年4月1日〜平成18年3月31日

「ご入会のお申し込みは美術館スタッフまでお尋ねください。」 086 2223 1733

編集後記

6号目となりました美術館ニユース、いかがでしたでしょうか。今回は特別展「みずのきの絵画」を監修していただきました西村陽平先生に本展に関連した原稿をご寄稿いただきました。

8月11日から9月20日までの長期休館の間、皆様にはご迷惑をおかけいたしました。本年度は12月にも特別展がございます。たくさんの方のご来館をお待ちしております。

(T)

〒700 0823 岡山市丸の内一七一五

財団法人 林原美術館

TEL 〇八六 二二三 一七三三